

国際交流プログラム「司書の海外研修:ホーナー日本交流基金」について

—アリゾナ州図書館協会と日本図書館協会の交換研修10周年—

小泉 徹

1. 「司書の海外研修」プログラム

日本図書館協会の海外研修プログラム「司書の海外研修:ホーナー日本交流基金」という名称は、その由来が若干わかりにくいものになっているかもしれない。「司書の海外研修」とは、1991年から始まった日本図書館協会による海外研修制度の名称である。詳細についてはここでは省かせていただくが、文部省(当時)の団体補助金により運営され、年に1~4名の参加者が1~3か月間各国の図書館を自ら立てた研修計画に従って図書館見学や研修を受けるものであった。

平成3年度:3名(米国, 英国, ドイツなど), 平成4年度:4名(英国, 米国, カナダ), 平成5年度:3名(英国, 米国, カナダ), 平成6年度:2名(英国, カナダ), 平成7年度:3名(米国, 北欧), 平成8年度:1名(フランス), 平成9年度:2名(米国, 東南アジア諸国), 平成10年度:1名(米国)

約8年間続いたプログラムであったが、残念ながら平成10(1998)年度を最後に文部省からの資金援助が打ち切られることになった。

2. 「ホーナー日本交流基金」プログラム

「Horner Japanese Exchange Fellowship」(ホーナー日本交流基金)は、1989年にアリゾナ州図書館協会(AzLA)が、故Layton Horner氏(※後述)の遺産によってスタートさせた、日米間の交換図書館員プログラムである。

このプログラムは発足以後数年は交換ではなく、アメリカから日本への一方通行の調査見学プログラムだった。ホーナー基金によって6名の米国図書館員が日本を訪問して日本の文化に触れ図書館訪問などを行った。この企画に関わってアリゾナ州図書館協会の国際交流委員会やホーナー基金責任者のために研修のアドバイスやアレンジを行い、また日本からのアリゾナ図書館見学ツアーなどを企画されてきたのが、アリゾナ州立大学図書館学

大学院フェローの志保田務氏である。

同プログラムが10周年を迎えた1999年に、この国際交流プログラムの拡充をすることとなり、米国からだけでなく日本からも図書館関係者を招聘することが決定された。

3. 「司書の海外研修:ホーナー日本交流基金」

1999年、酒川玲子日図協事務局長のころに志保田務氏(桃山学院大学教授)を通じて打診があり、前任の日図協国際交流委員長の田中梓氏と筆者とで志保田氏にお会いしてお話をお聞きし、日本図書館協会とアリゾナ州図書館協会間で正式に協定を結び、隔年で交換研修プログラムを発足させることになった。滞在プログラムの調整や募集などについては国際交流委員会(現国際交流事業委員会)が窓口となった。したがって昨年2009年が、日本図書館協会とアリゾナ州図書館協会の共同プログラムとして10周年にあたる。

この海外研修プログラムの運営費は基本的にすべてホーナー氏の遺産に依っている。さらにマリアン未亡人が亡くなった2005年からは遺産額が増やされたので毎年交互に交換図書館員が行き来するようになり、日本側の経費の一部も同基金から補助を受けている。

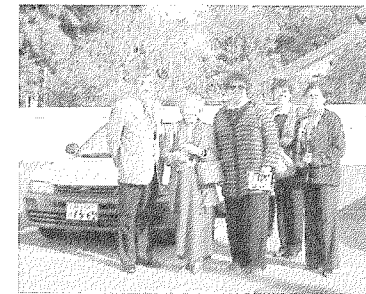
米国での滞在はホームステイが基本になっているのでアリゾナの図書館員のボランティアによる部分も少なくない。日本滞在の場合はホテル利用が多いが、関西訪問の際には山邊義毅・瑞枝夫妻のように何年間もアリゾナの図書館員の宿泊をお世話いただいた方もいる。過去の参加者は下記の通りである。

2000年:本山徳子(恵泉女学園高等学校図書館), 2002年:Judyth Lessee, 2004年:内野安彦(茨城県鹿嶋市立中央図書館), 2005年:Kristin Fletcher-Spear, 2006年:伊東達也(春日市民図書館), 2007年:Deborah Tasnadi, 2008年:矢田麻美(千葉工業大学図書館), 2009年:Nancy Deegan。

連絡訪問者:鎌田均, 志保田務, 克子ホテリング, 宮部頼子, Mimi McCain, 小泉徹, Carol Elliott, Shizuko Radbill。

4. 日本での研修, アリゾナでの研修

アリゾナからの研修生にとっては日本の図書館事情だけでなく日本文化についての興味が先立つことも多い。杉原千畝氏(ナチスドイツ時代にビザを多数発行してユダヤ人を救った外交官)に興味があったジュディスさんの場合は、藤原是明氏(中部学院大学助教授・当時)に案内をお願いし岐阜県八百津町の記念館を訪問し町を上げて歓迎していただいたこともあった。



杉原千畝未亡人の杉原幸子さん(故人)とジュディスさんを囲んで

ご主人共にマンガが趣味の図書館員クリスティンさんは日本漫画家協会会長の森田幸次氏とお会いしたり、関西では手塚治虫記念館や京都精華大学マンガ学部を訪問したりした。

日本からの参加者も、アメリカの先進的なサービスやIT環境だけでなく、日本とまったく異なるアリゾナの厳しい自然環境や社会的背景の違いに訪問してみて驚かされることも多い(報告書については、日本図書館協会HPの国際交流事業委員会の項目を参照)。

5. ホーナー氏とマリアン夫人

このプログラムのルーツは、先に触れたように、故レイトン・ホーナー氏と故マリアン夫人の国際交流への遺志に基づいている。プログラム発足から約20年、日本図書館協会が関わってから10年がたつ。下記は、主にアリゾナ州図書館協会のホームページとホーナー基金担当者Charlotte Cohenさんからの情報を参考にした故人の紹介である。

レイトン・[ジャック]・ホーナー(Layton "Jack" Horner)氏は1914年ペンシルヴァニア生まれ、テキサス州のライス大学卒、1932年・36年にはオリンピックに参加し聖火ランナーにもなった。38年にイェール大学神学校に進学し日本人松山三郎氏と生涯親交を結んだ。その後児童養護施

設長として働き、第二次世界大戦勃発後は海軍に奉仕、1946年にマリアン(Marian Johnsen)夫人と結婚した。

1947年から3年間は静岡県米軍基地に市民教育情報担当官として赴任し、教育委員会の設置など学校教育制度の刷新に尽力する傍ら、稲村松雄氏等による戦後初の中学生用英語リーダー「Jack and Betty」の編集にも関わった。この教科書はその後も版を重ね英語リーダーの代名詞的存在となり、アメリカの文化や社会を日本に紹介する一助にもなった。Jackはホーナー氏の呼名に由来する。

海軍を離れてペンシルヴァニアに戻ってからデンバー大学で東洋学の修士号、1973年にアリゾナ州立大学で博士号を取得後、各地で教鞭を取り、日米の交換英語教育プログラムを組織するなど、教育者として活動し1990年9月にアリゾナ州の自宅で生涯を終えた。同年初めには夫人と共にアリゾナ州立図書館の名誉会員として年次大会で表彰された。

Marian夫人は、ノルウェー移民の家系でワシントン州出身、アウトドアと冒険好きでアラスカでホーナー氏と出会って後に共に日本にも何回も滞在することになった。無私無欲な夫妻は子どもには恵まれなかったが、夫人の母親の面倒をみつづ養子を貰って共に暮らした。ホーナー氏を失ってからは、犬や親しい友人と生活を楽しみワシントン州で亡くなった。ホーナー氏はピッツバーグ郊外の教会に、夫人はワシントン州シルバーデールの墓地に遺骨が埋葬されている。



故レイトン・ホーナー氏とマリアン夫人

(こいずみ とおる:立教大学図書館,

元JLA国際交流委員会委員長)

[NDC9:010.7 BSH:1.研修(図書館員) 2.国際交流]